んによみがえった。当時飯本信之先生は若手の教授で，保井コノ，黒田チカなどという偉い女性教授は，私などそばへも寄れないおごそかな存在だった。

ところで，51年は事情があって国内の各地をかなり数多く単身歩き廻ることができた。12月など，月の半分の日数は東京を外にしていた。その最後の小旅行を山口・島根の県境で行った。ここで私は地形の面白さ，地形と人間のいとなみの巧みな結合の片鱗にふれて，心から楽しかった。どのように心をひかれたかは，数ケ月後に記事にすることができるかも知れない。（昭和52年1月3日）

地域住民の心を！

尾原信彦

昭和20年代の後半頃，電源開発のブームが数年間続き，私もそれに狩り出されて，ダムサイトの地質調査に，地下足袋にハンマー携行のいでたちで，峻しい渓谷を跋渉したことがありました。その当時，非常に不思議に思ったことですが，ダム建設計画が公示されますと，必ずと云っていゝ程，将来締切により水が溜められる筈の盆地内に，木の香も新らしい納屋とか鶏舎とか，甚だしい場合は，畳敷きの住宅すら惜し気もなく建てられるのです。〃何と無駄なことだなあ〃　と思ったのですが，計画担当の当事者側は苦々しい表情で〃将来の補償金目当ての先行投資なんですよ〃　と，吐き捨てるように云っていたのを，思い出します。

現在，私はさる民間のコンサルタントに身を寄せて，新幹線とか高速道路の建設に先立つ地質調査に当面していますが，路線発表がありますと，必ず地元との用地交渉に手間が掛かりまして，立入許可をはじめとして，測量・伐採の容認，ボーリング地点の確保，踏み荒し料の支払い，跡片付けから原状復元まで，一々地主に立合いをして貰う始末です。ところが，いざ着工となると，これまた大変で，施工側はその諒承を取り付けるのに，気の長い交渉を続け．やっと補償金その他が決着した区間から，順々に工事を始めますが，談し合いの付かなかった区間は，何年でも放置されます。したがって，上越新幹線のようなケースでは，新潟県下でさえ，飛び飛びに寸断された儘で，〃開通はいつのことやら〃という風景が，到る所で望見される仕儀となります。成田空港なども，その最もひどい例でして，政府もいよいよ〃今年こそは〃と，滑走路の延長に建てられた鉄塔取壊しの決意を固めたと，報道されましたから，最后にもう一悶着が起き，定めし物々しい凄惨な場面が発生することでしょう。

一体これらはどう云うことなのかと思索してみましたが，日本人の土地に対する執念の現われとも考えられますし，またゴネ得というエゴイズムの表現かも知れないし，〃親方日の丸〃・〃寄らば大樹の蔭〃という甘えの構造かと諦観してみました。いずれにせよ，このような思潮が国中に蔓延しているという状況は，確かに不健全な事態と云わざるを得ません。しかし一方政府側にも，何か手落ちがあるのではないかと，疑って見たくなりました。

職務柄，情報蒐集の出張に旅立ち，偶々さる地方農政局の計画官に面接して，取材した際に，この人から聴いた〃農政の心〃という談話に，思わず膝を乗り出しました。彼曰く，『農林省でも，大型ダムや長距離用水路や舗装農道・林道を建設しております。でも，必ず農村・山村の共同体からの要

請に基いた計画が組合→村→市(町)→県→農林省と上程されて参りまして，それが国会で予算化の暁は，大臣からの予算執行が指示され，完工すれば，その管理権は地元の共同体に還付される仕組みになっています。したがって着工に先立って，地元との紛争は決して起りえないし，これこそ正に日本的な民主主義の現実成果の姿なのです。まあ，建設省や運輸省系の大型プロジェクトは，いってみれば，〃国が計画し，国が造り，国が管理するのだから，地元住民は邪魔にならないように，おとなしくそこを退け〃と云う発想なのです。だから徹底的に反発するのでしょう』と。私は謹んで傾聴したあと，叩頭して辞去した次第です。

ヤロオの谷を訪れて

籾山政子

スコットランドの南，ボーダーカントリーと呼ばれる地方に美しいヤロオYarrowの谷がある。このあたりのハイランドの斜面には時折，羊の群れがみられるし，黒い岩石を積み重ねて造った牧場の柵もみられる。ピンクがかった紫色のヒースのカーペットも一層，趣をそえる。ヤロオの谷をさかのぼって行くと，ナチュラル・ミラーの別名を持った静かなセント・メリーロック(湖)が美しい姿をみせる。まるで夢のようなところ。私はこんなヤロオにひきつけられて，ついに二回も訪れてしまった。

ヤロオにひきつけられるそのわけは，私の好きな田園詩人ウィリアム・ワーズワスが歌ったところだからである。ワーズワスはヤロオの詩を三たび書いた。訪れぬヤロオYarrow Unvisited(1803年)，ヤロオを訪ねてYarrow Visited(1814年)，再びヤロオを訪ねてYarrow Revisited(1831年)と。その詩を少し拾ってみよう。

〃あゝ，ヤロオの牧場は緑だ。
ヤロオの流れは心地よい！
……
吾々はスコットランドを行くのだ。
蓋し近いとはいえ，
ヤロオの谷へは引き返すまい。〃

だがワーズワスは遂にヤロオを訪ねた。

〃それがヤロオか？
わが空想がかくも忠実に育くんで
胸に描いた幻想の流れか，
実物をみたために破られた幻影か？〃
……

とワーズワスは悲しみにみちた長い詩をつづるが最後には，

〃然し何処にいっても，ヤロオの面影は私と共に住み，私の喜びを高め，